



こいのぼりのうろこに色を塗る子供たちを見守る奥村みずほさん ー兵庫県姫路市

# 知育力

今週のキーワードは？

「美術は数学や理科のように答えは一つではない。だからこそ無限の可能性を引き出し、観察力や想像力、コミュニケーション能力を高めることができる。世の中に答えがないように、結果だけに走らない訓練になるんですよ」と藤吉祐子主任研究員。

すべてに結果は伴わなくても、子供たちの可能性を信じて表現力を養うことは、世の中を生きる力にも結びつく。「芸術」の枠にとどまらない美術の持つ力を、次世代を担う子供たちに感じてもらいたい。

(木村郁子)

## 秘められた子供の能力



「海外のように美術館がもっと身近な存在であるとうれしい」と話す藤吉祐子さん ー大阪市北区(南雲都撮影)

「もっと青色の絵の具入れて」「これ、どう思う?」。テントの下で丸い生地に色を塗る子供たち。ゴールデンウィーク真っ最中の今月4日、兵庫県姫路市のJ.R.姫路駅前にある商業施設の屋上で、こいのぼりに色を塗るイベントが行われた。13色の水彩絵の具を使って、うろこを1枚ずつ描き、計千枚、12体のこいのぼりを完成させた。来場者は5日間で約700人にのぼった。

奥村さんは9歳の頃から舞台上に立って演技をしてきた。短大卒業後は遊園地に就職し、イベント司会などを行った。退職後はプロダクションに所属し、歌のおねえさんや子供ショーの司会などとして活躍。しかし37歳のとき、仕事上で最も大切な声が出なくなった。別の仕事を探そうと訪れたハローワークで偶然、カラーコーディネーター養成コースを知った。

子供らを対象に鑑賞学習に取り組むのが国立国際美術館(大阪市北区)。ワークショップをはじめ、小中高生らに向けて常設展で鑑賞学習プログラムを行っている。藤吉祐子主任研究員は「芸術作品は、視点を変えればまったく違って見えるもの。美術鑑賞は、いわば想像力を養う術にもなるんですよ」と話す。

# 美術や工作で感性養って

積極的に作品と向き合えるよう、オリエンテーションを実施。展示品のスケッチ、オブジェに込められた意味や形、重さなどを想像してもらうため多彩なツールを配布。美術館体験がより充実できるように工夫している。

「絵や工作を通して子供たちの表現力が高まれば、30年後の日本はきっといい方向に変わっていると思うんです」。イベントを主催した「エデュセンス」(大阪市西区)代表の奥村みずほさんは力を込めた。

「声がだめなら色彩があるじゃない」と即断し、半年間受講した。「日本は色鮮やかな国なのに、それを子供たちに伝える場がない」と立ち上げたのがピカソプロジェクト

4歳の娘を持つ母親でもある藤吉さんは、思わぬ作品の前で子供が立ち止まっているのを見て、驚かされることも多いという。「一つの作品であってもとらえ方は人それぞれ。答えがないからこそ、人との違いに気づく。対話を積み重ねることで、多様な社会に対応できる力がつくのでは」と話した。